

## 生前説と四次元主義 ——死後の害に関する二つの見解の親和性——

吉沢 文武

### 1 死後の害

われわれの常識に従えば、死者は「死後の害 (posthumous harm)」を被りうる。例えば自分の死後にも家族が幸せに暮らすことは、多くのひとにとって切実な願いだろう。そして、その願いの挫折が死者の幸せや福利に対してなんの影響も与えないというのは常識に反する。あるいはそのような願望の挫折がなくとも、死はそれ自体で悪いことであり、われわれは死によって「死の害 (harm of death)」を被ると考えられている。だが他方でエピクロス以来よく知られている次の問題がある。ひとの死がそのひとの存在の終焉だとすれば、誰が、いつ、どのような害を被るとするのか。害を被る主体であるはずのそのひとは、死後にはもはや存在しない。このような問題が帰結することから、エピクロスは死が死ぬひとにとって害悪であるという見解を退けたのであった<sup>1</sup>。この「主体の問題 (problem of subject)」が生じるのは、あるひとが死にまつわる害 (mortal harm) ——死後の害および死の害——を被るとして、

- (a) 死にまつわる害は死後に被る害である。
- (b) その主体が存在しない時間に害を被ることはない。

という二つの前提をどちらも採るためだと言える。

本稿の目的は「死後の害」の存在を主張する(反エピクロスのな)複数の理論のうち、(a)の拒否を試みる二つの異なる立場の親和性を示すことである。その二つの立場とは、G・ピッチャーやJ・ファインバーグによる「生前説 (Priorism)」<sup>2</sup>(「標準的説明」<sup>3</sup>とも呼ばれる)と、H・シルバースタインによる

<sup>1</sup> シルバースタインはエピクロスの見解 (Epicurean View: EV) を次のようにまとめなおす。「生きているひとは死の害悪 (evil) を被っていない。しかしそのひとが死んだ後にはそのひとはもはや、善や害悪を受ける者 (recipient) としては存在しない。」そのため、EVに従えば、死が害悪であるという考えは誤っているだけでなく、概念的に一貫しないことになる (Silverstein (2010), p. 283)。

<sup>2</sup> 生前説論者には Feinberg (1984), Pitcher (1989), Scarre (1997), Luper (2007) らがいる。

<sup>3</sup> Portmore (2007), p. 27.

「四次元主義 (Four-Dimensionalism)」である。主体が害を被る時間について、前者の立場は「生前」と説明し後者の立場は「無時間的」と説明し、見解は一致しない。だが二つの見解は、害を被る時間についての説明を除けば非常によく似ているのである。

本稿は、死後の害の帰属時間に関するシルバースタインの見解の詳細な検討を中心に、次のように議論を進める。まず生前説と四次元主義をそれぞれ概観し、その共通点をまとめる(第2節)。その後、シルバースタインの見解を詳細に見る(第3節)。さらに、シルバースタインの「無時間的な害」という概念のポイントを批判的に明らかにし、二つの見解に実質的な違いはなく、むしろ「生前」と説明することがもっともらしいと論じる(第4節)。

## 2 二つの見解の共通点

シルバースタインによる例<sup>4</sup>をもとに、次のケースを考えてみよう。

シアトルで暮らす夫婦アンとダンがいる。ダン是自己に対する妻アンの愛を信じている。ある日アンはスポーケンに行き、仕事仲間であるヴァンと浮気をする。アンがスポーケンに向かった直後、ダンはシアトルで死んでいた。

さて、ダンはどのような死にまつわる害を被るだろうか。

生前説： 死後の害について生前説は次のように説明する。「それら〔死後の出来事〕はわれわれが活着している間において態度を向ける命題を真にする (truth-making) 条件になりうる。未来についての事実はわれわれの現在の利害関心 (interest) に反することがありえ、つまりそれらが利害関心に反するとき、われわれの福利 (welfare) はありえたものより小さい。」<sup>5</sup>ダンは、自分の死後もアンが自分を愛し続けるという欲求を生前にもつ。アンの浮気はダンの死後に起こる。この出来事はダンの生前の欲求に反するため、ダンは欲求をもって死前の時間に死後の害を被る。また、彼の死は彼がもつ他の多くの欲求を挫折させるため、それによってもダンは害を被る。これにより、死が悪いというわれわれの常識の一部——死そのものの害である「死の害」とは区別されるが——も説明される。

---

<sup>4</sup> Silverstein (2010).

<sup>5</sup> Luper (2007), p. 248. □ 内は引用者による補足。

四次元主義： 次にシルバースタインの見解である。シルバースタインの見解は二つの構成要素からなる。一つはシルバースタインの立場の呼び名になっている「四次元主義 (Four-Dimensionalism)」<sup>6</sup>という形而上学的枠組みである。後に詳しく見るが、時間的に離れた過去と未来の対象や出来事が現在存在する対象と同様の意味で存在する、という存在論的見解である。この枠組みを援用する理由の一つは、時間的に離れた対象や出来事について有意味に語るためである。もう一つの柱の「価値は感情に結びつく (Values Connect with Feelings: VCF)」という見解は次のものである<sup>7</sup>。ある出来事があるひとに害を及ぼすには、そのひとの否定的感情とその出来事に実際の (actual) 結びつきがあることは必要でなく、たんに可能的な結びつきがあれば十分である。また、感情の対象、状態、出来事はそのひとの態度の可能的な対象 (object) であれば十分であり、可能的な原因 (cause) である必要はない<sup>8</sup>。VCF は、心的状態などに実際の内在的变化がなくとも——死後の出来事には気づきえない——主体が害を被りうることを説明し、さらに逆向き因果へのコミット——生前は死後よりも時間的に前である——を避けるためのものである。この見解によれば、ダンの死後に起こるアンの浮気によってダンに否定的感情は生じないが、ダンが害を被るのである。ただしシルバースタインによれば、主体がこの害を被るのは「無時間的に (atemporally)」である。この点については後で振り返るとして、生前説と四次元主義の両見解は共通する次の3点にまとめることができる。

(i) 生前の主体がもつ心的状態を説明に用いる： 生前説は欲求や利害関心という心的状態を説明に用いる。四次元主義は主体の可能的経験や感情を説明に用いる。

(ii) 内在的变化などの実際の影響なしにも、死後の出来事が害を与える

<sup>6</sup> シルバースタインは「四次元枠組み (four-dimensional framework)」という呼び方を好む。以下シルバースタインの採用する見解を「四次元主義」と呼ぶが、正確に言えばシルバースタインの見解は時間に関する「永久主義 (eternalism)」と対象の持続に関する「四次元主義」を組み合わせた見解である。ここで説明したのは時間に関する「永久主義」の内容である。また本稿では持続に関する「四次元主義」としてワーム説だけを扱う。

<sup>7</sup> Silverstein (1980), pp. 107ff, Silverstein (2000), pp. 122-4, Silverstein (2008), pp. 569-75, Silverstein (2010), p. 284.

<sup>8</sup> Silverstein (2010), p. 284. シルバースタインはこの考えについて「発見されていない不貞は疑いをもっていない配偶者にとっても害悪である」(Silverstein (2010), p. 284) という例を挙げ、T・ネーゲル (Nagel (1979)) や B・B・レーベンブック (Levenbook (1984)) の見解と同様のものだと述べている。いわゆる「純粋に関係的な害」と呼ばれる見解のひとつの説明の仕方だと理解できる。

と説明する： 両者とも次のように説明する。害を被る主体が害を与える出来事に気づく必要も、その結果として悪い影響を経験する必要もない。必要とされるのは実際の経験ではなく、害を被る反応可能性 (responsiveness)<sup>9</sup>や、出来事と感情との間の可能的な結びつき (connection)<sup>10</sup>である。

(iii) 時間を隔てた存在者を害の説明に必要とする： 生前説によれば、死後の出来事は主体が生前にもつ欲求の対象である命題を偽 (真) にし、それにより欲求を挫折 (充足) させる条件である。四次元主義において、死後の害は時間を隔てた諸対象との関係による害として説明される。

また、時間的に離れた対象について生前説だけでは有意味に語れないという困難があるが——生前説が存在論的に中立的であることに由来する——、四次元主義を援用することでその困難は解決するよう見える。以上で見た限り、両見解はとても親和的である。しかし、二つの見解は害の帰属時点に関して明らかに一致しない。どちらも確かに「死後」ではないと説明する点で一致しているが、一方は「生前」と他方は「無時間的」と説明する。この不一致をどう考えればよいだろうか。

### 3 シルバースタインの四次元主義

歩み寄る必要があるのはシルバースタインのように見える。ひとは生まれてから死ぬまでの間だけ存在する存在者であり、その対象の被る「無時間的な害」をどのようなものと理解すべきなのか判然としない。他方で「生前」という見解にそのような不明瞭さはない。生前説を採る S・ルーパーは次のように述べる。シルバースタインの見解は不明瞭であり、シルバースタインが「無時間的」と主張するのは、「生前」という見解が奇妙だという理由からである。よって、生前説が奇妙ではないと説明されれば (もちろんルーパーはそう説明するわけだが)「生前」と答えるべきである<sup>11</sup>。実は Silverstein (1980)から Silverstein (2008)まで、「無時間的な害」についての説明は注で補足的に述べられるだけであり、見解の不明瞭さに対するルーパーの批判はもっともだと言える。そのような批

---

<sup>9</sup> Luper (2007), p. 244.

<sup>10</sup> Silverstein (2000), pp. 122-4.

<sup>11</sup> Luper (2007), pp. 250-1.

判に対しシルバースタインは Silverstein (2010)をその応答として位置づけている<sup>12</sup>。以下ではその論文を中心にシルバースタインの見解を詳細に検討する。

シルバースタインは「いつ、死は死ぬひとにとって害悪であるか」という問いにどう答えるのか。その答えは「答えはない(no answer)」というものである。

「無時間的」とはそういう意味である。再びシルバースタインの例をもとに詳しく見ることにしよう。ダンの妻アンは 50 歳の若さで死ぬのであった。シルバースタインによれば「いつ、アンの死はアンにとって害悪であるか」という問いに対する答えは次のものである<sup>13</sup>。

- (1) アンの人生の時間は 1951 年 1 月 1 日正午から 2001 年 1 月 1 日正午までである。
- (2) アンが死んでいる時間(time during which Ann is dead)は 2001 年 1 月 1 日に（あるいはその直後に）始まり、その時点から無期限に (indefinitely) 続く。
- (3) アンの死がアンの否定的感情の可能的な対象である時間は、アンの人生の範囲内に完全におさまる。
- \* (4) 上の (1)、(2)、(3) がこのケースにおける時間についての関連する事実のすべてである。

シルバースタインは死の害も死後の害も上の仕方で説明できるとする。死の害および死後の害についての時間に関する事実は、時間的に離れた事実 (1)、(2)、(3) に尽きる。このことから、それらによる害が「無時間的」であるとシルバースタインは説明するのである。より詳しい検討のために、空間的に離れた出来事による害についての彼の見解も見ておこう。今度の例ではダンもアンも生きている。ダンはシアトルにおりアンはヴァンとスポーケンで浮気をする。「どこでアンの浮気はダンにとって害悪であるか」という問いにシルバースタインは次のリストを挙げて「どこでもない」と答える<sup>14</sup>。

<sup>12</sup> Silverstein (2010)の第 1 節で「いつ、死は死ぬひとにとって害悪であるのか」という問いに主に答え、第 2 節では、この問いに対し「死が起こらなければ善い人生を生きていたであろう時間」（つまり死後）と答える見解 (Bradley (2010)) を批判する。

<sup>13</sup> このリストは Silverstein (2010), p. 284 の三つの項目（本文リスト項目 (1)、(2)、\* (4)）に p. 291 で加えられる見解(項目(3))を加えて再構成している。同様のリストは Silverstein (2000), p. 131 n. 6 に挙げられている。

<sup>14</sup> Silverstein (2010), p. 287 の議論（本文リスト項目 (1)、(2)、\* (4)）および p. 291 の議論（項目 (3)）から構成したリストである。

- (1) アン（とヴァン）による浮気はスポークンでなされる。
- (2) ダンはシアトルにいる。
- (3) アンの浮気によってダンが苦しむ（would [or could] be suffering）のはシアトルにおいてである。
- \* (4) 上の（1）、（2）、（3）がこのケースにおける場所についての関連する事実のすべてである。

さらに、アンがダンの頭をフライパンで叩くというケース——害を及ぼす出来事と害の主体が時間空間ともに離れていない、つまり、害の主体の内部で出来事が起こるケース——については次のように述べる。「この〔ダンの〕頭が強打されたことは、ダンにとって、ここでいま害悪である。」<sup>15</sup>

このように見ること、生前説と四次元主義の関係は明確になるだろう。主体が害を被るという事実は（3）の事実に基づくのだと、生前説は説明している。シルバースタインも同様の見解を採るわけにはいかないのだろうか。実際、彼は——死の害についてであるが——次のように述べる。「もし『いつ死は死んだひとにとって害悪であるか』という問いにわれわれが答えを与えなければならぬとすれば、最良の答えは、〔……〕『ひとの人生の時間の間』だと私には思われる。それは、あるひとの死がそのひとの否定的感情の可能的な対象である時間はこの時間だけだからである。」<sup>16</sup>だが、シルバースタインはあくまで次の点について譲らない。「しかしながら、上述の〔リストの〕時間についての主張それ自体は、アンの死が彼女にとって害悪である時間を特定化しないままであるし、われわれに特定化を要求しないままである」<sup>17</sup>。「無時間的」と説明する限り依然として生前説の説明とは隔たりがある。次節では、形而上学的枠組みとしての四次元主義における時間的述定に関する説明に注目し、シルバースタインの思惑とシルバースタインが採るべき見解を明らかにすることを試みる。

<sup>15</sup> Silverstein (2010), p. 286. □ 内は引用者による補足。

<sup>16</sup> Silverstein (2010), pp. 290f.

<sup>17</sup> Silverstein (2010), p. 291. □ 内は引用者による補足。

#### 4 四次元主義における性質帰属

先にも少しだけ述べたが、四次元主義の基本的な考え方をここで確認する。四次元主義によれば、アンの頭といったアンの空間的部分が空間的領域を占めるのと同様に 1960 年 1 月 1 日のアンの時間的部分 (temporal parts) が四次元空間の時間的領域を占める。四次元主義のもとでは、アンのような日常的持続物——われわれが日常的にひとだと考えるような対象——がある時点に性質をもつのは、持続物が時間的部分を (ある時点にではなく) 端的にもち、時間的部分が (例えば重さといった) 性質を端的にもつことによってである。

一般的な単項の時間的な性質帰属は、 $a$  を任意の日常的対象、 $a$  の時点  $t$  の時間的部分を  $a_t$  として、次のように分析される<sup>18</sup>。

(TP1) 時点  $t$  において  $a$  は  $F$  である  $\Leftrightarrow a$  は  $F$  である時間的部分  $a_t$  をもつ。

さて、あるひとが害を被るということはどのように説明されるのか。頭を強打される例は単純である。時点  $t$  にダンの頭が強打されたことによる痛みなどの害は、ダンの  $t$  時間的部分 (およびその後の一定の時間的領域を占める時間的部分) に帰属することで、ダンが被ると説明される。前節の最後に挙げた (シルバースタインによるところの) 「無空間的 (aspatial)」な性質の例を、冒頭の例にあわせ次のように (シルバースタインによるところの) 「無時間的」な性質の例に修正しよう。t1 に、ダンはシアトルにおりアンの愛を信じている。t2 に、ダンはシアトルで死に、t3 にスポーケンでアンはヴァンと浮気する。リストにすれば次のようになる。

- (1) t1 にダンはシアトルにおりアンの愛に関して欲求をもつ。  
(t2 にダンはシアトルで死ぬ。)
- (2) t3 にアン (とヴァン) による浮気がスポーケンでなされる。
- (3) アンの浮気によってダンが苦しむるのは t1 にシアトルにおいてである。
- \* (4) 上の (1)、(2)、(3) がこのケースにおける場所と時間についての関連する事実のすべてである。

<sup>18</sup> 以下の説明は Sattig (2002), p. 330 を参考にした。また D・ルイスによる様相に関する対応者理論の定式化 (Lewis (1986), pp. 214-7) も参考にした。

(3) は (1) を構成要素として含むだろう。(2) と (3) には次のように (TP1) を適用することができる。

(2) ⇔ アンは、スポーケンに位置し浮気するという性質をもつ時間的部分アン<sub>t3</sub>をもつ。

(3) ⇔ ダンは、シアトルに位置しアンの浮気によって苦しむという性質をもつ時間的部分ダン<sub>t1</sub>をもつ。

問題は「アンの浮気によって害を被る」という性質をダンが「いつ」もつかである。生前説は (2) と (3) の事実に基づいて「t1 に」と答えるだろう。他方のシルバースタインは同じ事実に基づいて「無時間的に」と答える<sup>19</sup>。両者の間に実質的な見解の不一致はないと思われるにもかかわらず、である。私の見るところ、ここで起こっている不一致は、時間を隔てた関係をどのように表現するかについての見解の不一致である。

事態は次のようになっていると思われる。a, b を任意の日常的対象として、「a が b を害する (a harms b)」という二項関係について考えよう。この二項関係に関する一つの文は、区別できる二つの単項性質に関する二つの文として表現することができる。形式的には演算子 λ を用いて、

- [A] Hab : a が b を害する
- [B] λx[Hxb](a) : b を害するという性質を a がもつ
- [C] λy[Hay](b) : a に害されるという性質を b がもつ

と、[B] と [C] を区別して表現できる。アンが t3 に「ダンを害する」という関係的性質をもつことと、ダンが t1 に「アンによって害される」という関係的性質をもつこととは、二つの単項の性質に関する事実だと表現することもできるが、本当は（ここでは害を「x は y を害する」という形の二項関係だと仮定したので）、「アンはダンを害する」というアンとダンの関係についての一

<sup>19</sup> シルバースタインは別の例について次のように述べる。「ナポレオンについての問題に対する私の答えは次のものである。ナポレオンは 1769 年から 1821 年まで生きた。彼は 2000 年に賞賛される(is)。それがこの事例の「いつ (when)」についての真実のすべてである。賞賛されるという性質を「いつ」ナポレオンが例化 (exemplifies) するかについてのさらなる問いなどない。」(Silverstein (2000), p. 133 n. 13.)



うの事実である。このように見ること、次のように推測できる。シルバースタインが「無時間的な害」として考えているのは「アンはダンを害する」という一つの事実について、それが起こるのが $t_1$ か $t_3$ かを一つに特定できないということだろう。そしておそらくこれは次のこととも対応する。上述の (TP1) にならって、時間的な二項関係  $R$  の帰属は次のように一般に分析される、と言いたくなる。つまり、

(TP2) 時点  $t$  において  $a$  は  $b$  に対して  $R$  である  $\Leftrightarrow$   $a$  は時間的部分  $a_t$  をもつ &  $b$  は時間的部分  $b_t$  をもつ &  $a_t$  は  $b_t$  に対して  $R$  である。

である。ところで時間を隔てた「アンがダンを害する」に関しても (TP2) の右辺と同様の形で、

アンは時間的部分アン<sub>3</sub>をもつ & ダンは時間的部分ダン<sub>1</sub>をもつ & アン<sub>3</sub>はダン<sub>1</sub>に対して  $H$  である。

と表すことができ、関係に関する一つの事実として分析がなされると言いたい。だが、分析の右辺となるべき箇所に時間情報が二つ現れており、アンとダンのケースに (TP2) は適用できない。(TP2) を時間的な二項関係の述定に関する分析と呼ぶのであれば、(TP2) が適用されないアンとダンのケースは時間的な事実ではなく、その意味で「無時間的」な事実だと言える。そして、二項関係は一般には (TP2) の形で分析されないのである。

しかし、ここで問題が生じるように見える。アンがダンを害するという一つの無時間的な事実に関する日常的な言い回しは、「時刻  $t_3$  にアンがダンを害する」といった、一方の対象が位置する時間情報だけを含むものだろう。例えば「2010年4月1日に哲学講座の新生はソクラテスを賞賛する」という文は自然な表現だろう（他方で「紀元前 469-399年にソクラテスが哲学講座の新生に賞賛される」は正しく事態を記述する仕方ではないだろう）。だがこれら日常的な表現に対しそのまま (TP2) が適用されると、ダンの時刻  $t_3$  における時間的部分ダン<sub>3</sub>やソクラテスの2010年の時間的部分が存在することになってしまう<sup>20</sup>。ではどうすべきか。もしかすると、時間的事実を表すと日常的に考

<sup>20</sup> 永久主義的四次元主義は死後の時点にも時間的部分が存在するという見解ではない。この点が誤解されることがあるとして、シルバースタインは次のように述べる。「リンカーン

えられる文のいくつかに対して (TP1) と並行的に見える (TP2) が適用されないことは、四次元主義の魅力を増ないかもしれない。だが、退けるべきなのが関係一般について (TP2) の形で分析を与えることなのは、明らかだと思われる。一つの方法として次のように考えることができるだろう。一般に二項関係は二つの単項の性質帰属 [B] と [C] に区別され、その後でそれぞれの文に (TP1) が適用可能となる、と。

さて、以上は害を「x は y を害する」という関係として考えた場合に成り立つ議論である。浮気の害は害関係と見ることが自然だと思われる例である。ソクラテスへの賞賛の例 (害の例ではない) はまさに関係の例である。だが、シルバースタインが無時間的だと述べるのはあくまで「アンの浮気による害を被る」といった単項の性質についてである。しかしながら、これに関しても無時間的だと主張する必要はないと思われる。

「アンの浮気による害を被る」という性質は、(ダンにとって外部の対象である) アンの浮気がなければもちえない関係的性質であり、ダンの内在的状态には還元されないだろう。だがそれは、

(3') シアトルで、アンの浮気によりダンが苦しむという性質をもつ。

がダンの内在的状态に還元されないのと同じ意味においてである。シルバースタインはこの性質を t1 の時間的事実として認めている。(この性質がダンのもつ物理的な状態などに還元されるにせよされないにせよ、いずれにしても時間的部分がもつ単項の性質である。) 他方、「害を被る」という関係的性質が本当は害関係なのだとすれば、無時間的なのは関係であり、無時間的な性質を認める必要はない。「～は害を被る」という述語が四次元主義のもとで適切に時間的部分によって分析されることは理論の統一性の観点から好ましいだろう。四次元主義のもとで死後の害は、存在する時間的部分によって分析され、その意味で「無時間的」にではなく「生前」にもつ性質と説明されるべきだと言える。他方、無時間的と呼ぶのは関係である。シルバースタインはこの点を区別していないと推測できる。

---

は存在する」という無時制の存在言明は永久に無時間的に真である、という永久主義の見解が「リンカーン自身が永久に存在し、時間的境界を欠くということを意味しないのは、『ジョージ・W・ブッシュが存在する』という文がどこにおいても真であることが、ブッシュの存在それ自体があらゆる空間に延長していることや空間的境界を欠くことを意味しないのと同じことである。」(Silverstein (2010), pp. 285f.) このような誤解をしているとしてシルバースタインはブラッドリーの見解を批判する。

## 文献

- Bradley, B. (2010), "Eternalism and Death's Badness," in Campbell, J. K., O'Rourke, M. and Silverstein, H. (eds.), *Time and Identity*, MIT Press, 2010, 271-81.
- Feinberg, J. (1984), "Harm to Others," in Fischer, J. M. (ed.), *The Metaphysics of Death*, Stanford University Press, 1993, 171-90.
- Levenbook, B. B. (1984), "Harming Someone after His Death," *Ethics* 94, 407-19.
- Lewis, D. (1986), *On the Plurality of Worlds*, Blackwell Publishing.
- Luper, S. (2007), "Mortal Harm," *The Philosophical Quarterly* 57, 239-251.
- Nagel, T. (1979), "Death," in *Mortal Questions*, Cambridge University Press, 1979, 1-10. [トマス・ネーゲル「死」『コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳、勁草書房、1989年。]
- Pitcher, G. (1989), "The Misfortunes of the Dead," *American Philosophical Quarterly* 21, 183-8.
- Portmore, D. (2007), "Desire Fulfillment and Posthumous Harm," *American Philosophical Quarterly* 44, 27-38.
- Sattig, T. (2002), "Temporal Parts and Complex Predicates," *Proceedings of the Aristotelian Society* 102, 279-86.
- Scarre, G. (1997), "Should We Fear Death?" *European Journal of Philosophy* 5, 269-82.
- Silverstein, H. (1980), "The Evil of Death," *Journal of Philosophy* 77, 401-24.
- (2000), "The Evil of Death Revisited," *Midwest Studies in Philosophy* 24, 116-34.
- (2008), "'The Evil of Death' Defended: Reply to Burley," *International Journal of Philosophical Studies* 16, 569-79.
- (2010), "The Time of the Evil of Death," in Campbell, J. K., O'Rourke, M. and Silverstein, H. (eds.), *Time and Identity*, MIT Press, 2010, 283-95.

(よしざわ ふみたけ／千葉大学大学院人文社会科学部 博士後期課程)